

気遣い特性が要求表現の使い分けに与える影響 ——個人差に注目して——

1200484 中野 優也

高知工科大学 経済・マネジメント学群

1. 序論

1.1 対人関係の特性

人々は、対人関係を円滑にしていくために、自身または相手を傷つけないよう行動をしている。

特に、対人関係を円滑にすることが重要な発達段階として青年期が挙げられる。

従来の青年期理解において岡田 (1993) では、自己への関心の高まりと、親密な友人関係の希求が青年期の大きな特徴とされてきた。

岡田 (1993) では、内省尺度・友人関係の深さに関する尺度を変量としたケースのクラスタ分析で、内省に乏しく友人との関係を拒否する傾向が高い群や、内省、対人恐怖傾向が共に高く自己評価が低い群、自分自身について深く考えず友人関係に対しても躁的な態度を示す群の3つの大きなクラスタがあると示された。

そこから、現代青年は、内省の乏しさ、友人関係の深まりといった特徴を示しているとされ、他者を傷つけないために気遣う人や、自分も他者も傷つかないように他者との関わりを避ける人がいると言われている。

また、満野 (2015) では、気遣いを相手および相手との関係のために行われる向社会的行動あるいは自己防衛および関係維持のために本心を隠す抑制的行動と定義し、満野・今城 (2013) で作られた気遣い尺度では、相手および相手との関係のための向社会的気遣いと自己防衛および関係維持のために本心を隠す抑制的気遣いの2因子があることを見出している。

このように近年、対人関係において相手を傷つけないように本心を隠して相手を気遣う人がいたり、自身も傷つきたくないからと他者との関わりを避けようとしたりする人など、さまざまな気遣い特性を持つ人がいるということが示されている。

1.2 ポライトネス理論

他者との関わりを避けようとしても、生きていく上で他者と関わらなければいけない場面がある。例えば、仕事で何かわからないことがあれば上司に聞くという場面もあれば、後輩に何か運んでもらいたいというような場面もある。

他者に対して物事を頼む状況で相手を傷つけないようにし、関係を維持するための要求表現を説明する理論として Brown and Levinson (1987) のポライトネス理論がある。

ポライトネス理論は社会学者の Goffman (1967) のフェイスを鍵概念とした理論である。フェイスとは、ある人がある特定の交流の場で取っていたものだと他人たちがみならず、その際に取ったその態度 (line) によって、その人が自分についてくる当然な評価だと事実上言えるポジティブな社会的価値と定義している (平川・深田・樋口, 2012a)。要求表現というのは時にこのフェイスを脅かすものであり、例えば上司にわからないことを聞くときに、友達に聞くように「これ教えて」と言えば上司のフェイスを傷つける可能性が考えられる。

この要求表現について Brown and Levinson (1987) では、話し手は聞き手との親しさ (社会的距離) や社会的な地位の違い (社会的地位)、頼むものごとの負担 (要求量) を認知して、相手のフェイスをどの程度傷つけるのか (フェイス脅威度) を認知し、その度合いが高いほどより丁寧な表現を用いたり、より間接的な表現 (いいまわし) を用いたりすると言われている。

しかし、Brown and Levinson (1987) は実証的な研究に基づいたものではないため、理論の妥当性の検討について多くの研究がなされてきた、その中でも、平川ら (2012a) では、ポライトネス理論の社会的距離、社会的地位、要求量の3要因が丁寧な表現や間接的な表現の使い分けに影響を及ぼしているのか、理論の妥当性の検証について研究されている。

この研究では、大きく2つの研究から構成されている。

研究1では、予備調査で荷物を運んでもらうときに使用する要求表現の収集と選定を行い、本調査では選定された15種類の要求表現の丁寧度と間接度を測定し、各表現の丁寧度得点と間接度得点を作成している。

研究2では、社会的距離、社会的地位、要求量の3要因を操作した荷物を運んでもらうときのシナリオを8種類制作し、そのシナリオ下で、先程の15種類の要求表現の使用可能性と最も使う可能性のある要求表現1つ回答させている。

そして、最も使う可能性のある1つの要求表現を研究1で作成したそれぞれの丁寧度得点と間接度得点に置き換え、3要因の操作が丁寧度と間接度にどのような影響をおよぼしたのかを調査している。

その結果から、3要因の認知が高まると丁寧な表現が使用されるが、3要因の認知は使用される要求表現の間接度には影響を及ぼさ

ないということが示されている。また、影響過程についても Brown and Levinson (1987) の見解とは異なり、社会的距離と社会的地位の認知に関しては直接影響を及ぼす過程が存在するということが示されている。

1.3 問題と目的

岡田 (1993) や満野ら (2013) の研究では、相手を傷つけないという気遣いには、3つのクラスタに分かれ、向社会的気遣いや抑制的気遣いに分かれるように、個々人にタイプがあると示されているにもかかわらず、ポライトネス理論については3要因の認知に個人差があるというような研究はされていない。

ポライトネス理論における性格特性による影響を検討することは、岡田 (1993) における青年期や対人恐怖症の理解について、ポライトネス理論の3要因の認知と要求表現の使い分けによってアプローチができるのではないかと、また、性格特性によって認知の違いが示されれば、気遣いだけではなく、様々な性格特性によって、ポライトネス理論について多面的な研究ができるのではないかと考えられる。

また、Brown and Levinson (1987) でフェイス脅威度の認知を媒介することによって3要因が影響するとあるが、平川ら (2012a) においてはその仮説の妥当性は低いと判断されている。

そのため、ポライトネス理論の妥当性において、平川ら (2012a) で行われた3要因の操作による丁寧度と間接度に与える影響について再検討するという事は、再現性においても、ポライトネス理論を今後実証的な研究として調査していく上でも、必要であると考えられる。

そこで、本研究では、平川ら (2012a) で行われた、3要因の認知と要求表現の使い分けの再検討を行うと共に、満野ら (2013) の大学生の友人に対する気遣い尺度を取ることで、気遣いの度合いが、要求表現の使い分けに影響を与えるのかを調査する。

2. 予備調査

平川ら (2012a) の研究で行われた、15種類の要求表現の丁寧度と間接度の測定を行う。

2.1 予備調査の目的

本調査にて3つの要因と話し手が気遣う度合いの違いが丁寧度と間接度に与える影響を検討するためには、平川ら (2012a) で選定された15種類の要求表現それぞれの丁寧度得点と間接度得点を高知工科大学学生から作成する必要がある。

そのため、予備調査では15種類の要求表現がどの程度丁寧な表

現なのか、また、どの程度間接的な表現のかを回答させ、各要求表現の平均を取ることで、丁寧度得点と間接度得点を作成しなければならない。

そこで予備調査は、平川ら (2012a) で選定された15種類の要求表現の丁寧度と間接度を高知工科大学の学生を対象にして再測定することが目的である。

2.2 方法

2019年度第3Qの心理学に関連した講義を受講している高知工科大学の学生154名に対して質問紙調査を行った。有効回答数は153名(男性86名、女性65名、不明2名;平均年齢18.8歳、SD=0.98)であった。質問紙の構成は平川ら (2012a) の研究1の本調査で作成された質問紙を使用した。

平川ら (2012a) の研究1の予備調査で選定された、荷物を運んでもらいたいときに使用する表現15種を呈示し、それぞれの表現に対して、2つの項目に7件法で回答させた。

詳しい内容は、

「下の枠内には、人に頼みごとをする架空の場面が書かれています。

場面中の“あなた”を自分自身であると想像しながら、文章を読んでください。

後で、質問に答えて頂きますので、ゆっくり丁寧に2回繰り返し読んでください。」

この表記の後、

「あなたは、大学3年生です。ある日同じ学群の教授に頼まれ、荷物を運ぶことになりました。その荷物は、重くて大きいために、1人で運ぶのは苦勞しそうですが、2人なら簡単に運ぶことができそうです。そこに偶然、Aさんが通りかかりました。そこで、あなたはAさんに荷物を運ぶのを手伝ってもらうことにしました。」

というような具体的なシナリオを読んでもらった。

そして、このシナリオの状況で、提示された荷物を運んでもらいたいときに使用する要求表現15種類(例えば、荷物を運ぶのを手伝って、よろしければ荷物を運ぶのを手伝ってくれませんか)に対して、

下の(1)(2)のような7段階で丁寧度と間接度を測定した。

(1) 表現の丁寧度: 1. とても失礼—7. とても丁寧, (2) 表現の間接度: 1. とても直接的—7. とても間接的

なお、この予備調査では平川ら (2012a) の研究1で行われていたように、表現が持つ丁寧度と間接度の値を測定することが目的であるため、聞き手との関係性に関わる社会的距離、社会的地位及

び要求量に関わる情報を含めていない。また、シナリオの記述において、「所属コースの教授に頼まれ」という記述のままでは、学群制の高知工科大学では伝わりにくいと考えたため、「同じ学群の教授に頼まれ」という記述に変更した。

2.3 結果と考察

すべてのデータはHADを用いて統計分析を行なった(清水, 2016)。

各表現における測定項目の平均値および標準偏差を表1に示す。

各表現における測定項目の平均値および標準偏差については、平川ら(2012a)と大きな数値の違いは見られなかったため、おおよそ同じと見て進めていく。

表現の丁寧度と間接度の相関係数を算出した結果、

($r(151) = -.156, p = .054$)であった。

両概念間に負の相関関係が見られた平川ら(2012a)に対して、丁寧度と間接度には相関関係がないことが示された。

この結果は、平川ら(2012a)の知見を支持する結果となり、丁寧度と間接度を同一概念として扱うことの問題性をさらに示している。

表1		
各表現における各次元の平均値(SD)		
	丁寧度	間接度
1 荷物を運ぶの手伝って	3.49(1.07)	1.36(1.23)
2 一人で荷物を運ぶのは大変なんです	4.03(1.50)	5.40(1.67)
3 荷物を運ぶの手伝ってくれるとうれしいなあ	3.62(1.47)	4.30(1.91)
4 ちよつと荷物を運ぶの手伝って欲しいんですけど	4.78(1.57)	2.22(1.41)
5 荷物を運ぶの手伝って下さい	6.00(1.09)	1.39(1.31)
6 荷物を運ぶの手伝ってもらっていい?	5.12(1.33)	1.87(1.31)
7 この荷物を運ばないといけないんだよ	2.72(1.17)	5.59(1.56)
8 荷物を運ぶの手伝ってくれる人探しているんだけど	3.77(1.44)	4.99(1.55)
9 荷物を運ぶの手伝ってあげない?	4.73(1.37)	1.78(1.48)
10 重くて一人じゃ運べないんです	3.84(1.25)	5.46(1.57)
11 荷物を運ぶの手伝っていただけるとおかげがたいんですが	6.17(1.27)	2.59(1.68)
12 荷物を運ぶの手伝ってくれるよね?	1.87(0.96)	2.50(1.91)
13 荷物を運ぶの手伝ってもらえないかなあ	4.00(1.32)	2.82(1.86)
14 荷物を運ぶの手伝ってもらえたら助かります	5.96(1.07)	2.52(1.60)
15 よろしければ荷物を運ぶの手伝ってくれないか	6.78(0.658)	1.97(1.76)

3. 本調査

3.1-1 本調査の目的

平川ら(2012a)の研究で行われた、聞き手との社会的距離、聞き手の社会的地位および要求量が、使用される要求表現の丁寧度と間接度に及ぼす影響を再検討するとともに、友人に対する気遣い尺度(満野ら, 2013)を用いて、話し手の気遣い度合いが、聞き手との社会的距離、聞き手の社会的地位および要求量と独立して、使用される要求表現の丁寧度と間接度に影響を及ぼすのかを

検討する。

3.1-2 方法

2019年度第3Qの心理学に関連した講義を受講している高知工科大学の学生138名および、2019年度2学期の経済学に関連した講義を受講している高知工科大学の学生53名の合計で191名に対して質問紙調査を行った。有効回答数は184名(男性114名、女性69名、不明1名; 平均年齢18.9歳、SD=0.81)であった。

3.1-3 質問紙内容1

8種類のシナリオと、全条件共通の質問紙2種類の3つをセットにした小冊子を、講義終わりの学生に協力してもらい回答してもらった。シナリオの内容は、予備調査と同様に、荷物を運ぶの手伝ってもらうことを要求する場面で、聞き手の社会的地位および要求量を操作することで丁寧度と間接度へ及ぼす影響を検討するため、シナリオの記述では、社会的距離2(高:あまり話したことのない、低:仲の良い)×社会的地位2(高:先輩の4年生、低:後輩の2年生)×要求量2(高:階段で4階上の部屋まで、低:同じ階の隣の部屋まで)の3要因を操作した。

また、8種類の質問紙の回答数を均等にするため、無作為配布を行った。

回答者には、8種類のうち1種類が配布され、そのシナリオをゆっくり丁寧に2回繰り返して読ませた上で、本研究では、15種類の表現をどの程度使用するのか、使用可能性:1. 全くあてはまらない-7. よく当てはまる、最も使用する表現を15の表現の中から1つ選択させた。

平川ら(2012a)の研究2とのシナリオ操作上での変更点は、本研究の予備調査でも変更した理由と同じく、学群制の高知工科大学では伝わりにくいと考えたため「所属コースの教授に頼まれ」という文を、「同じ学群の教授に頼まれ」という記述に変更した。また、社会的地位の操作において、(高条件:先輩の大学院生、低条件:後輩の学部生)では、高知工科大学の学生は、大学院生と関わりの少ないので、(高条件:先輩の4年生、低条件:後輩の2年生)に変更し

3.1-4 質問紙内容2

平川ら(2012a)で用いられた質問紙に回答してもらった後、回答者それぞれの他者に対する気遣いの度合いを調査するため、友人に対する気遣い尺度(満野ら, 2013)を回答してもらった。

回答者には、普段のあなたにどの程度当てはまるか教えてくださいと、「友人が悩んでいるようだったので、話を聞く」というような向社会的気遣い因子の質問11問と、「友人が同意を求めているよ

うだったら、本心でなくても同意してあげる」のような抑制的気遣い因子の質問 12 問の 2 因子で構成された 23 問を 7 件法 (1. 全くあてはまらない-7. よく当てはまる) で回答してもらった。

3. 1-5 平川ら (2012) の再検討結果

すべてのデータは HAD を用いて統計分析を行なった (清水, 2016)。

初めに、平川ら (2012a) で行われた社会的距離、社会的地位、要求量の 3 要因が丁寧度と間接度に与える効果を確認するため、予備調査で得られた 15 個の表現それぞれの丁寧度と間接度を用いて、個人の丁寧度点と間接度点を作成した。具体的には、回答者が読んだシナリオの状況下で、“荷物を運ぶのを手伝って”という表現を使用する可能性が最も高いと回答した場合、予備調査で得られた“荷物を運ぶのを手伝って”という表現に対する丁寧度得点及び間接度得点を用い、この回答に対する丁寧度得点は 3.49、間接度得点は 1.36 として分析を行なった。

3 要因の高低条件別 (8 シナリオ) に使用された表現の丁寧度得点と間接度得点の平均値および標準偏差を算出した。(表 2、3)

社会的距離		高		低	
社会的地位	要求量	高	低	高	低
高	高	6.07 (1.06)	5.32 (0.84)	5.87 (0.92)	4.84 (0.85)
	低	6.41 (0.52)	5.61 (0.87)	6.12 (0.62)	4.86 (0.76)

社会的距離		高		低	
社会的地位	要求量	高	低	高	低
高	高	2.40 (1.02)	2.10 (0.33)	1.87 (0.40)	2.16 (0.77)
	低	2.09 (0.35)	1.93 (0.34)	1.99 (0.45)	2.00 (0.84)

次に、丁寧度得点に関して、社会的地位、社会的距離、要求量を独立変数とする 3 要因分散分析を行った。

その結果、社会的距離の主効果が有意であり ($F(1, 175) = 12.38, p = .001$)、社会的距離低条件 ($M = 5.43, SD = 0.98$) よりも社会的距離高条件 ($M = 5.82, SD = 0.93$) の得点が有意に高かった (図 1)。また、社会的地位の主効果が有意であり ($F(1, 175) = 62.48, p = .000$) 社会的地位低条件 ($M = 5.16, SD = 0.88$) よりも社会的地位高条件 ($M = 6.11, SD = 0.81$) の得点が有意に高かった (図 2)。

このことから、聞き手との社会的距離と聞き手との社会的地位が高まると、より丁寧な表現が使用されることが示された。しかし、要求量的主効果 ($F(1, 175) = 3.40, p = .067$) (図 3) および各要因の交互作用効果 (1) について、有意な差は見られなかった。

(1) 社会的距離と社会的地位の交互作用効果 ($F(1, 175) = 2.43, p = .121$)、社会的距離と要求量の交互作用効果 ($F(1, 175) = 0.56, p = .457$)、社会的地位と要求量の交互作用効果 ($F(1, 175) = 0.35, p = .555$)、社会的距離と社会的地位と要求量の交互作用効果 ($F(1, 175) = 0.14, p = .705$)。

図1 丁寧度得点における3要因分散分析での社会的距離の主効果

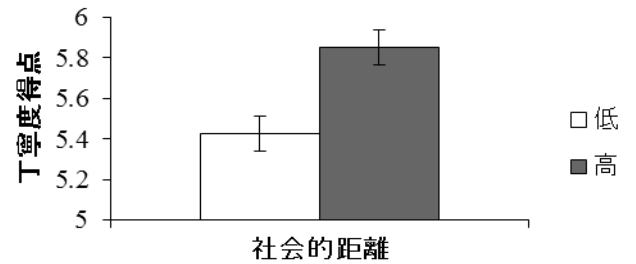


図2 丁寧度得点における3要因分散分析での社会的地位の主効果

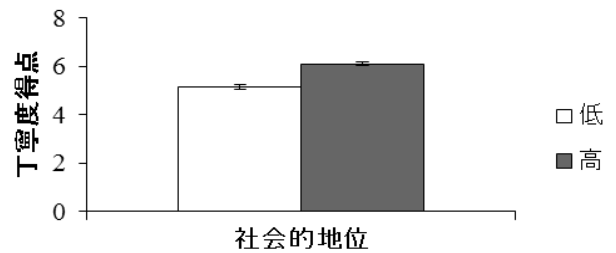
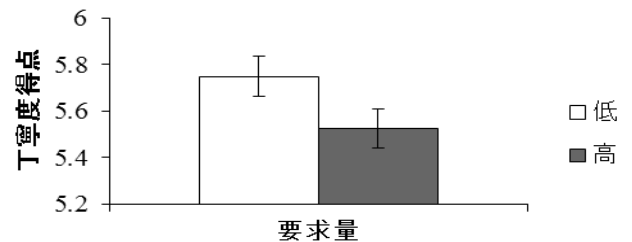


図3 丁寧度得点における3要因分散分析での要求量の主効果



さらに、間接度得点に関して社会的地位、社会的距離、要求量を独立変数とする 3 要因分散分析を行った。

その結果、社会的距離の主効果に有意な差は見られなかった ($F(1, 175) = 1.88, p = .172$) (図 4)。

また、社会的地位の主効果にも有意な差は見られなかった ($F(1, 175) = 0.20, p = .654$) (図 5)。

さらに、要求量的主効果にも有意な差は見られなかった ($F(1, 175) = 2.04, p = .155$) (図 6)。

図4 間接度得点における3要因分散分析での社会的距離の主効果

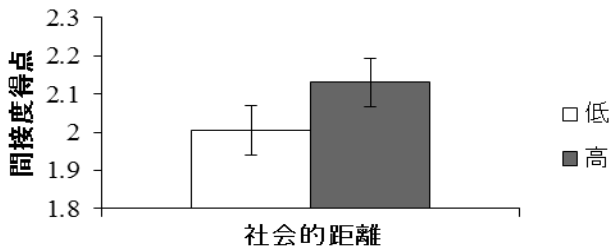


図5 間接度得点における3要因分散分析での社会的地位の主効果

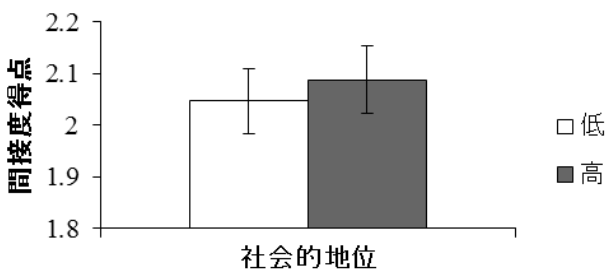


図6 間接度得点における3要因分散分析での要求量の主効果

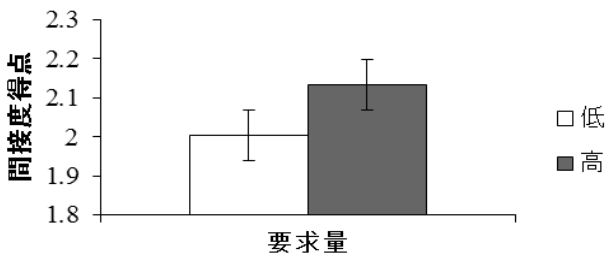
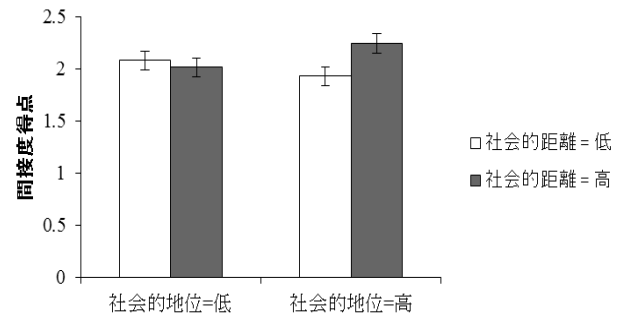


図7 間接度得点における3要因分散分析での社会的地位と社会的距離の交互作用効果(下位検定)



3.2-1 友人に対する気遣い尺度 (満野・今城, 2013) の因子分析の結果

友人に対する気遣い尺度 (満野ら, 2013) について因子分析 (最尤法、プロマックス回転) を行った結果、因子数は、先行研究どおりの項目の分け方をした。(表4)。

しかし、3項目について因子負荷量が.40未満であり、その中で問6が抑制的気遣い因子に分かれたが、本研究ではその違いが分析結果に影響しないと判断したため、本研究の分析では先行研究どおりに、3項目を除外せずに問6を向社会的気遣い因子に含めた。その結果、Factor1を抑制的気遣い因子に、Factor2を向社会的気遣い因子とした。

因子間相関は.738であり、 α 係数は、抑制的気遣い因子は.892、向社会的気遣い因子は.863と十分な信頼性が得られた。

しかし、社会的地位と社会的距離の交互作用 ($F(1, 175) = 4.44, p = .037$) が有意となった。

下位検定の結果、社会的地位高条件における社会的距離の単純主効果 $F(1, 175) = 5.88, p = .016$ が有意となり、社会的距離高条件 ($M = 2.25, SD = 0.78$) のほうが社会的距離低条件 ($M = 1.94, SD = 0.43$) よりも間接度得点が高かった (図7)。

一方で、社会的地位低条件における社会的距離の単純主効果は有意な差は見られなかった ($F(1, 175) = 0.28, p = .599$) (社会的距離高条件: $M = 2.02, SD = 0.34$; 社会的距離低条件: $M = 2.08, SD = 0.80$)。

項目	Factor1	Factor2
Q2.22	.888	-.126
Q2.21	.822	-.165
Q2.23	.796	-.038
Q2.20	.782	-.101
Q2.16	.731	-.010
Q2.5	.588	.149
Q2.2	.568	-.006
Q2.19	.547	.164
Q2.9	.506	.187
Q2.4	.472	-.038
Q2.12	.438	.283
Q2.10	.323	.086
Q2.6	.314	.306
Q2.17	-.068	.809
Q2.18	-.044	.719
Q2.1	-.077	.696
Q2.3	.116	.682
Q2.13	-.087	.675
Q2.11	-.080	.675
Q2.14	.017	.583
Q2.7	.041	.551
Q2.15	.272	.428
Q2.8	.108	.363

3.2-2 気遣い尺度を含めた丁寧度得点の分析結果

今回は、抑制的気遣いと向社会的気遣いが丁寧度と間接度に与える影響をみるため、初めに丁寧度得点に関して、共変量に抑制的気遣いを含めた3要因共分散分析を行った。

その結果、社会的距離の主効果が有意であった ($F(1, 174) = 11.58, p = .001$)。

また、社会的地位の主効果が有意であった ($F(1, 174) = 63.37, p = .000$)。

しかし、要求量の主効果 ($F(1, 174) = 3.85, p = .051$) と抑制的気遣い的主効果 ($F(1, 174) = 2.00, p = .160$) および各要因の交互作用効果について、有意な差は見られなかった。

次に丁寧度得点に関して、共変量に向社会的気遣いを含め、同様の分析を行った。

その結果、社会的距離の主効果が有意であった ($F(1, 174) = 11.39, p = .001$)。

また、社会的地位の主効果が有意であった ($F(1, 174) = 61.89, p = .000$)。

しかし、要求量的主効果 ($F(1, 174) = 3.64, p = .058$)、向社会的気遣い的主効果 ($F(1, 174) = 0.44, p = .507$) および各要因の交互作用効果について、有意な差は見られなかった。

3.2-3 気遣い尺度を含めた間接度得点の分析結果

次に、間接度得点に関して、社会的地位、社会的距離、要求量を独立変数とし、共変量に抑制的気遣いを含めた3要因共分散分析を行った。

その結果、社会的距離の主効果に有意な差は見られなかった ($F(1, 174) = 2.15, p = .144$)。また、社会的地位の主効果にも有意な差は見られなかった ($F(1, 174) = 0.18, p = .677$)。さらに、要求量的主効果にも有意な差は見られなかった ($F(1, 174) = 2.34, p = .128$)。最後に、抑制的気遣い的主効果も有意ではなかった ($F(1, 174) = 1.45, p = .229$)。

しかし、社会的地位と社会的距離の交互作用 ($F(1, 174) = 4.50, p = .035$) が有意となった。

下位検定の結果、社会的地位高条件における社会的距離の単純主効果 ($F(1, 174) = 6.25, p = .013$) が有意となった。

一方で、社会的地位低条件における社会的距離の単純主効果は有意な差は見られなかった ($F(1, 174) = 0.22, p = .643$)。

間接度得点に関して、共変量に向社会的気遣いを含めた同様の分析を行った。

その結果、社会的距離の主効果に有意な差は見られなかった ($F(1, 174) = 1.79, p = .183$)。

また、社会的地位の主効果にも有意な差は見られなかった ($F(1, 174) = 0.20, p = .658$)。

さらに、要求量的主効果にも有意な差は見られなかった ($F(1, 174) = 1.96, p = .163$)。

向社会的気遣い的主効果も有意ではなかった ($F(1, 174) = 0.01, p = .912$)。

しかし、社会的地位と社会的距離の交互作用 ($F(1, 174) = 4.50, p = .035$) が有意となった。

下位検定の結果、社会的地位高条件における社会的距離の単純主効果 ($F(1, 174) = 5.62, p = .019$) が有意となった。

一方で、社会的地位低条件における社会的距離の単純主効果は有意な差は見られなかった ($F(1, 174) = 0.28, p = .596$)。

4. 考察

4.1 先行研究の再検討に対する考察

平川ら (2012a) で行われた、3要因が丁寧度と間接度に及ぼす影響について再検討を行った結果を簡単に比較すると、丁寧度においては社会的距離と社会的地位の2つが本研究と平川

(2012) 共に主効果が有意な結果になり、要求量及び各要因の交互作用効果は確認されなかった。

また、間接度においては平川ら (2012a) が要求量のみ主効果が

確認され、各要因の交互作用効果は確認されなかったのに対し、本研究では3要因の主効果は確認されなかったが、社会的距離と社会的地位の交互作用効果が確認された。

この有意差が出たのかどうかの比較だけでは、同じ結果、または違った結果が出たとは言いきれない。そこで今回は、平川ら(2012a)の3要因の作用の妥当性について再検討する上で平川(2019, 私信)による情報を用いて効果量 d で比較することで、影響の大きさを確認することにした。

その結果、丁寧度と間接度共に3要因とも同じような効果量が確認された(表4)。

さらに、平川ら(2012a)で確認され、本研究では有意な効果が検出されなかった丁寧度における要求量の主効果は、有意な効果が見られた平川ら(2012a)よりもむしろ大きな効果量が見られている。したがって、本研究で有意な効果がみられなかったのは平川ら(2012a)に比べて、本研究のサンプルサイズが小さかったためという可能性がある。

加えて、丁寧度の社会的距離の効果に関して、平川ら(2012a)よりも今回の研究で効果量が大きい傾向にあることについては、今回の研究では、講義の終わりに質問紙を配布して回答させたため、一緒に講義を受けた親しい人を連想し、社会的距離の認知を促進した可能性が考えられる。間接度の社会的地位の効果に関して、平川ら(2012a)よりも今回の研究で効果量が大きい傾向にあることについては、社会的地位の操作において、高条件:4年生、低条件:2年生と、平川ら(2012a)から変更したため、回答者の社会的地位に対する認知がしやすくなった可能性が考えられる。

	丁寧度		間接度	
	本研究	平川ら(2012a)	本研究	平川ら(2012a)
社会的距離	-0.519	-0.22	-0.202	-0.15
社会的地位	-1.166	-1.78	-0.66	-0.03
要求量	0.272	-0.15	-0.211	-0.28

間接度得点における社会的距離と社会的地位の交互作用効果が見られた点については、間接的要求の過程にあると考えた。

平川・深田・塚脇・樋口(2012b)によると、間接的表現は、応諾獲得、印象管理そして明確拒否の回避などの利己的な要素の強い目標に対して利用する時に促進されると示されている。

そのため、今回の丁寧度得点における分析の中では、3要因の主効果はどれも見られなかったが、社会的地位が高い場合で社会的距離の高低によって差が見られたことから、社会的距離と社会

的地位の2要因が高条件のシナリオ下では、相手のフェイスを傷つけてしまうという考えより、他者のフェイスを傷つけたということによる自分のフェイス損傷を回避するためにより間接的な表現を使用した可能性が考えられる。

総じてまとめると、社会的距離と社会的地位が丁寧度に影響を及ぼし、要求量が間接度に影響を与えるという平川ら(2012a)の結果をおおむね支持する結果が得られた。

したがって、Brown and Levinson(1987)でフェイス脅威度の認知を媒介することによって、3要因が影響するという仮定の妥当性は低いとより考えられる。

しかし、回答する際の匿名性などの外的要因の影響によって結果が変化する可能性があることや、交互作用効果が見られたために要因間の加算性を考慮する可能性があるということについては再検討する必要が考えられる。

4.2 気遣い尺度を含めた分析の考察、今後の課題

本研究では、気遣い尺度における向社会的気遣いと抑制的気遣いを共変量として、丁寧度と間接度に与える影響を検討したが、どの場面においても、影響は見られなかった。

このことから、本研究において丁寧度や間接度において気遣い特性による個人差の影響があるとはいえない結果になった。

その理由として、平川・深田・塚脇・樋口(2011)では間接的要求の使用に及ぼす目標として、利己的な要因を目標としたときは促進されたが、他者配慮を目標としたときは促進されなかったため、気遣い特性という相手を気遣う性格特性においても間接度を促進しなかったのではないかと推察する。

しかし、気遣い特性が丁寧度に対しても促進する効果がみられなかったため、丁寧な表現の使い分けを促進する目標の要因についても検討していく必要があると考える。

さらに、本研究では、気遣い特性を用いて研究をした結果有意な結果は見られなかったが、他の性格特性においても個人差を考慮して研究していくことで、個々人のコミュニケーションにおける話し方の違いや、相手の話に対する受け取り方の違いについてもポライトネス理論を用いて理解できる可能性が導けるのではないかと考える。

謝辞

本研究を進めるに当たり、広島大学院教育学研究科心理学講座講師の平川真講師からは多大な助言及び平川ら(2012a)の実験で使われた質問紙の原本と、平川ら(2012a)再検討との比較で用いたデータを賜りました。厚く御礼申し上げます。

引用文献

- Brown, P., & Levinson, S. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. New York: Cambridge University Press.
- Goffman, E. (1967). *Interaction ritual: Essays on face-to-face interaction*. Oxford, England: Aldine.
- 平川真・深田博己・塚脇涼太・樋口匡貴 (2011). 間接的要求の使用に及ぼす目標の影響 日本心理学会第75回大会発表論文集.
- 平川真・深田博己・樋口匡貴 (2012a). 要求表現の使い分けの規定因とその影響過程: ポライトネス理論に基づく検討. *実験社会心理学研究* 第52巻 第1号.
- 平川真・深田博己・塚脇涼太・樋口匡貴 (2012b). 自己-他者配慮的目標が間接的要求の使用に及ぼす影響 *心理学研究* 2012 第82巻 第6号 532-539.
- 平川真 (2019). 私信.
- 満野史子・今城周造 (2013). 大学生の友人に対する気遣い尺度の作成と規定因の検討 *昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要*, 22, 31-46.
- 満野史子 (2015). 大学生の友人関係における気遣いの研究——向社会的・抑制的気遣いの規定因と影響—— 風間書店.
- 岡田努 (1993). 現代の大学生における“内省および友人関係のあり方”と“対人恐怖的心性”との関係 *発達心理学研究*, 5, 162-170.
- 清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD: 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 *メディア・情報・コミュニケーション研究*, 1, 59-73.